



## 「踊ることが好き」 - 視覚障害者へダンスを -

たか つ よう こ  
高津 容子

1942年(昭和17年)  
江戸川区小岩生まれ  
小岩在住



### ■ ダンスに出会う

私が7~8歳の頃、土曜日の夕方になると、小学校の校庭に電球を灯し音楽がかかっている。そこで見たのはお兄さんやお姉さんたちが楽しそうに踊っている姿でした。私も踊りたいな...と思いましたが、子どもでしたから相手にされませんでした。

私の3人の子どものうち、一番下の子が小学校に上がった年の運動会で、「父兄が踊る」というのがあったんです。似鳥さんという方が、PTAに頼まれてダンスを教えにきていたんです。その時に「ダンスって楽しいものだなあ」と思いました。似鳥さんが「土曜日の夜に、小岩の小学校でやっていますから、やりたい方はどうぞ」とおっしゃっていました。それからですね、私がダンスを始めたのは、38歳の頃でした。

似鳥さんは、昭和25年(1950年)頃、若い人を集めてフォークダンスの一種、スクエアダンスを最初に教えていた方なのです。マッカーサー元帥が「青少年に楽しみを与えよ」ということで始まったそうです。私が子ども時代に校庭の鉄棒につかまって見ていたのが、それだったということです。門前の小僧だったんですよ。その後、日本の学校でフォークダンスが踊られるようになったそうです。「マイムマイム」や「オクラホマミキサー」「コロブチカ」など御存知だと思います。

私のフォークダンスの先輩が、平成15年(2003年)頃から、ボランティアで視覚障害者へダンスの指導をしていました。私は、その頃「リズム運動」の指導員をしていました。その先輩が私に「早く来てね、早く来て手伝ってね」と言っていたのです。でも、私のリズム運動の定年の前年にその方が亡くなってしまいました。私は定年退職した翌日から視覚障害者へのダンス指導に行きました。

ダンスに来る視覚障害の方には、ガイド(付添人)さんが付きますので、ガイドさんも一緒に踊ります。視覚障害の方には、「見てください」というのができないので、言葉だけで踊りの動きを伝えます。

フォークダンスは、輪になって踊るものが多いんですよ。私たちは目が見えているから輪をつくることですが、視覚障害者は、真っ直ぐ進んでも、どこまで行って

いいのかわからない。また、自分の体を回転させたら、どっちが円心かわからなくなってしまいます。また、どちらかの耳が悪いと、聞こえる方へ聞こえる方へと曲がってってしまうのです。最初、そういうのがわからなかった。ですから、楽しく、事故のないようにアレンジします。レクリエーションダンスと言っています。

### ■ リズム運動の指導員に

「リズム運動」というのは、社交ダンスのワルツ、マンボ、ルンバなどのステップをアレンジしたものです。江戸川区独自の軽運動で、昭和55年(1980年)に誕生し、60歳以上の方を対象としています。

当時の区長さんが、ある日病院へ行ったところ、待合室でおしゃべりしている人たちが「今日は〇〇さん来ないけど、どうしたんだろうね、具合でも悪いのかな」と言っている。病院に来ないから具合が悪い?なんだ、これは。病院がサロン化している。それなら、健康と友だちづくりがいっしょにできるような仕組みをつくればいいんだ、と考えたそうです。それがきっかけ。そして、前例のなかった「指導員に報酬を出す」ことを決め、最初の頃は、社交ダンス関係者を指導員にしたそうです。

私は「フォークダンス」の会場で踊っていました。そこに、町内会の方が見えたんです。その方は「リズム運動指導員」のリーダーをしていて、その方の先輩がお辞めになるので、誰か探そうということで見に来たようです。後日、私の家に来て「こういう仕事があるんだけど手伝ってくれない?」「踊り、好きなんですよ」「ダンスが好きならできるから」とおっしゃって。

私は、最初「ええー、年寄りの相手...」と思いましたが。家には、じいさんばあさん(父母)がいましたからね。それ以前に「英語教材を使って遊ぶ教室」をやっていて、子ども相手は楽しいなあという思いでした。でも、リズム運動の指導員をやりだしたら、私の精神衛生にとってもいいんですね。まだ、40代半ばだったので、「先生、若くていいわねえ」「明るいね」「笑顔がいいね」とか言ってくれて。断然、こっちのほうがいいなあと思いました。

指導員になりたての頃は、高齢者の体の痛み思い

が至りませんでした。生徒さんたちが、「脚が痛い、腰が痛い、病院に行ったら〇〇と言われた」とか。私には、病気自慢し合っているように思えたんです。これが自慢話ではないと分かったのは、自分の体が痛むようになってからですね。そういうものに思いやりをもってやれるようになるまで、5年や10年かかったのではないのでしょうか。

リズム運動は、初心者教室、町内会などで行われています。「リズム運動」は社交ダンスのステップをアレンジしていますが、「ダンス」ではなくて「運動」なんです。指導員によって踊り方は少し変わるんですよ。でも、毎年大会があって、そこでは基本ステップで踊ります。2つの会場で行われる大会には、当時でも5,000人くらい参加しました。

リズム運動の指導員を足掛け20年、65歳の定年までやりました。リズム運動はとてもいいですよ。会員の方達は、運動後にファミレスでおしゃべりしたり、一緒に旅行に行ったり、お花見に行ったりとか。健康と友だちづくりという目的は、十分果たされていると思います。

## ■浅草の劇場

私は、3人きょうだいの長女。父は優しく穏やかな人で、母は病弱でした。私が小学校3年生の時に、5歳の弟が一晩で亡くなったんです。医者に診てもらっても原因がわからなかった。1週間後、私も同じ症状で死ぬ<sup>えきり</sup>思いをしました。疫痢だったんですね。

母は病弱で床に臥していることが多かったので、私と妹を外に連れ出すことができませんでした。なぜか、父が会社の近くにあった国際劇場に、私たち姉妹を連れていったんですよ。父が劇場の切符切りのおじさんに「何番の席に子どもが座っていますので、よろしく願います」と。国際劇場は、お芝居、歌、踊り、映画などやっていますよ。それらを観て長い時間いるの。終わる頃に父が迎えにくるんですよ。家に帰ってからは、舞台の「目線」っていうの、そういうのを妹と真似していました。

私たち姉妹は劇場の人たちと顔なじみになり、松竹歌劇団の楽屋に行ったり、映写機室を見学させてもらったりしました。劇場には、小学校4年生の頃から中学に入る頃まで季節ごとに開催される大規模な踊りの公演には必ず行っていました。

歳の離れた従兄から「容子が家を継がなきゃ駄目なんだよ。お父さんやお母さんを安心させてやらなきゃ駄目だよ」と、よく言われていました。父は何も言いませんでしたが、母は望んでいたようです。年頃になり、ボーイフレンドができて「この人は何人きょうだいかなあ、お婚さんに来てくれる人かなあ」とか考えちゃうんです。会社勤めを経て、26歳の時に同い年の人と結婚しました。

## ■小岩で生まれ、小岩で暮らす

私は、小岩生まれの小岩育ちです。私が5歳の頃、夜、窓を開けたら「ピチャピチャ」と水がたまっているの「お母

さん、お水があるよ」。そのうち玄関からも水が入ってきました。それが昭和22年のカスリーン台風、それから2年後にはキティ台風。どちらも大きな被害を受けました。なにしろ江戸川区は低地ですから。近くの小学校で避難生活をしました。

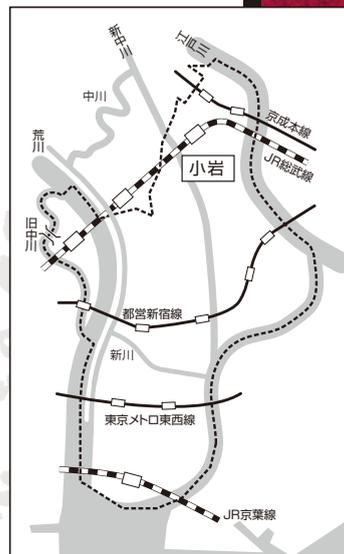
平成になってから母が亡くなり、父が元気なうちに家を建て直さなくてはと思ったのです。なぜ、そう思ったのか分からないのですが、自分としては、やはり父に見せたかったのだと思います。家を建て替えたときは、少し盛土しました。



◆視覚障害の方々と一緒に

現在、「(公益社団法人)日本フォークダンス連盟」の「東京都支部」の理事を務めながら、「江戸川区フォークダンス協会」でダンス指導をしています。フォークダンスというのは民俗舞踊なので種類も多くあります。盆踊りもフォークダンスの一種なんですよ。踊ることは楽しいし、健康にもいいですよ。

ダンスを始めて40年。ダンスだけは、誰かに勧められたというのは全くないのね。自分がやりたくてやったの。「あんた、どうしてそんなに踊りが好きなの?」と言われても、当たり前すぎて分からなかった。でも、最近、気がついたのです。子どもの頃に校庭で見たフォークダンスや、浅草の国際劇場で観た芝居や踊り。子どもの頃に接したもって、不思議なくらい自分のなかに入っていたんだなあと思います。



◆インタビュー／2019年7月  
2019年8月  
◆聞き手／小宮和枝 村田正子  
◆コーディネーター／樋口政則

◆お問い合わせ◆  
江戸川区女性センター  
☎5676-2455(代)